

FRENCH POLYNESIA

A HOTEL NAMED DESIRE

マーロン・ブランドも愛した 南太平洋の楽園、ホテル「ザ・ブランド」

タヒチ島から53キロ。俳優マーロン・ブランドの隠れ処だったテティアロア島に、ホテル「ザ・ブランド」がオープンした。35棟のヴィラと珊瑚礁に囲まれた手つかずの自然……。ポリネシアの新たな至宝が、素晴らしいひとときを約束してくれる。

BY MARC LA VAISSIÈRE



ザ・ブランドは、南太平洋に浮かぶテティアロア島のモツ(小島)のひとつに位置する。

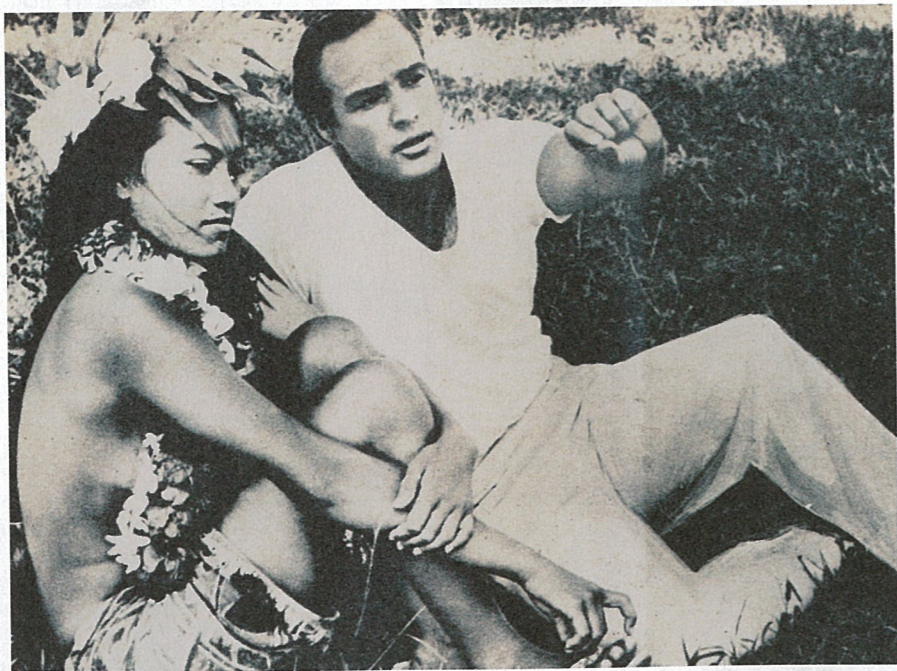
ホテル、ザ・ブランドのあるテティアロア島へと小型機が近づくにつれ、島の様子が少しずつ見えてくる。まるで、宝物のヴェールがゆっくりとはずされていくように。繊細なグリーンの水平線が、紺碧の太平洋と淡青色のポリネシアの空との間に、境界線を引く。島には12のモツ（タヒチ語で小島の意）があり、どれもココヤシの木に覆われ、古い噴火口を丸く取り囲んでいる。総面積は6kmとかなり小さい。内側には世界有数の美しいラグーンがあり、えもいわれぬターコイズブルーに輝く。太陽の光が当たると輝きを増し、乳白がかった独特の色へと変化する。オリジナルカクテル“テティアロア・ウォーター”はこの色にインスパイアされて誕生したという。創案者はザ・ブランドのチーフバーテンダー、オーレリアン。まずウォッカにティアレフラーワーを絞る。そこにグレープフルーツジュースと凍らせたココナッツウォーターを混ぜたら、最後にキュラソーを一滴。これで出来上がりだ。かのレオナルド・ディカプリオも、友人とともに滞在した際にこのカクテルを味わい、気に入っていたという。オーレリアンがさまざまなドリンクをサーブする円形のカウンターは、砂浜に直に作られ、ビーチから奥まった場所にある。



ラグーンの向こうには南太平洋が広がる。

1960年、アメリカの映画監督ルイス・マイルストーンが映画『戦艦バウンティ』の撮影のためにこの島へやってきた。バウンティ号航海士フレッチャー・クリスチャンの反乱は、1789年、まさにこのポリネシアで起こったから。

この常夏の島、テティアロアは、マーロン・ブランドが手に入れた心からリラックスできる楽園だった。ビーチサンダルと黄色い花柄の海水パンツ姿でも、パパラッチに追われる心配は一切ない。何くれとなく世話をしてくれるスタッフもいる。レイバンのサングラスと着古したTシャツというラフな出で立ちで、日中は自然の音に耳を傾け、夜はシガーをたしなむ。シャンパンを片手に、ボードゲームのスクラブルに興じながら。世の中の喧騒やハリウッドの栄光から、はるか遠く離れた場所で、エレガンスも肩の凝るシックスタイルもすっかり忘れて。そんな“楽園開拓者”の影響を受けて、今、テレビや映画のスターたちが、続々とテティアロア島へやってきている。たった35棟のヴィラしかない、常識外れのホテル、ザ・ブランドへ。ザ・ブランドは、ロビンソン・クルーソーがあらゆる“幸福のもと”を持ち込んだような隠れ処だ。



PHOTOS ROBERTA VALERIO, TIM MCKENNA, DR TRANSLATION: TEAM MTP



自然と調和した景観も醍醐味。

心身ともにリラックスできる。グリーンに囲まれたテラス。



どこまでも続く無人のビーチ。パリ、ル・グラン・ヴェアフルの2つ星シェフ、ギー・マルタンが総料理長を務めるレストラン、熱帯植物にすっぽりと包まれたスパ。木々に囲まれたトリートメントルームもある。そして手つかずの自然。ヴィラには、広々とした部屋、ゆったりとしたバスルーム、テラス、プライベートプールが備わり、この上なくリラックスできる。もちろん、常時接続できるWiFi環境や、フラットテレビも完備。サービスも充実しており、総勢120人のスタッフによる24時間体制だ。

ホテルを率いるのは3人で、まずはリチャード・ベイリー(ニックネームはディック)。ポリネシアのパシフィック・ビーチ・コーマ社(タヒチ島、ボラボラ島、モーレア島に計4つのリゾートと、豪華クルージング客船を2つ所有)のCEOで、この信じられないほど大がかりなプロジェクトのリーダー。そして、右腕として長年ベイリーを支えるフィリップ・プロヴェリ。さらに

総支配人のシルヴィオ・ビオン。島で心地よく過ごすにはどうしたらいいのか。そのルールを考えた。「その瞬間に何をしたいかだけに集中する。食べたいときに食べ、飲みたいものを飲み、やりたいことをやる」。テティアロア島はポリネシアの神々に祝福されている。そもそも、ここはポマレ王朝(17~19世紀)が領有していた。王族はこの島で休息し、まつりごとの疲れを癒した。そしてポリネシアの神々の英知に身をゆだねた。天はいつでも人々を温かい目で見守ってくださるのだと。王朝は滅亡したが、神々はまだそこにいる。

1960年、アメリカの映画監督ルイス・マイルストーンが、映画『戦艦バウンティ』の撮影のためにこの島へやってきた。1789年、バウンティ号の航海士フレックチャー・クリスチャンがブライ艦長に対して反乱を起こしたのが、まさにこのポリネシアだった。主演はマーロン・ブランド、36歳。現地通訳はタリタ、19歳。輝くように美しい女性だった。魅了されたブラン

ドはタリタについて「絶世の美女」と語り、やがて結婚。当時、テティアロア島は、タヒチ島の首都パペーテの歯科医の娘が遺産相続で所有していたが、本人は足を踏み入れたことがなかったという。ブランドは20万ドルで取引を成立させて、楽園を掌中にした。その後約20年(1970~1990年)をこの地で過ごすことになる。

撮影で彼が留守のときには、タリタが家を守った。テイホツとシャイアンというふたりの子供もいた。ブランドの次なる望みは、太陽の光に満ちた自分の新しい王国を、完璧な世界にすること。彼は夢を追い求め続けた。「テティアロア島に自給自足のコミュニティを作ること。農業、養殖、ツーリズムの共同研究機関や教育機関を設けること。自然環境を保護し、誰もがその恩恵にあずかることができ、しかもラグーンの生態系バランスを崩さないこと」。それがブランドのポリシーだった。ユートピアは手の届くところにあり、彼のアイデアが道を示すことになった。

PHOTOS ROBERTA VALORIO

インテリアは気品薫るモダンさが魅力。



「ブランドと僕のビジョンは同じだった。テティアロア島の自然を完全に保護すること。一方で、研究者と訪問客にはオープンであること」 by リチャード・ベイリー

ブランドの夢の実現は、リチャード・ベイリーに託された。彼もまた、30年前にポリネシア人と恋に落ちたアメリカ人だ。1999年にロサンゼルスでブランドと知り合い、ふたりは、ポリネシアとその希少な自然やホテル経営、よりよい世界について……つまり、人生について語り合った。

時を移さず、ふたりはテティアロア島の未来について熱心な会話を交わすようになる。「ブランドと僕のビジョンは同じだった。テティアロア島の自然を完全に保護すること。一方で、研究者とゲストにはオー

ブンであること」と、ベイリーは語る。長いこと世間から隔離されていた、この宝石のような島は、確かに手つかずの自然そのものだ。鳥類14種、魚類167種、植物158種が生息している。植物は38種が固有種。ウミガメはあらゆる危険から保護され、いくつかのモツが産卵場所に指定されている。ふたりは共通の信念に支えられ、ホテルのコンセプトについても意見が一致していた。そもそも、ブランド自身がそのコンセプトの実現に着手し始めている。1980年代に14のファレ(茅葺き屋根の小屋)を作り、ロビンソン・クルーソー志願者を募っ

て受け入れていた。1990年、ブランドがこの地を去ってから、テティアロア島は静けさを取り戻す。ブランドは2004年7月1日に他界。遺灰の一部は、彼が幸せな年月を過ごした、この珊瑚礁の島に散骨された。

10年後のちょうど同じ日、リチャード・ベイリーが、ザ・ブランドのオープニングセレモニーを開催。ブランドの身内も何人か出席した。ブランドの息子、テイホツ、46歳。テティアロア島を一度も出たことがなく、世間の目を避け、今も島で暮らしている。ミコは別の妻との間に授かった息子で、マイケル・ジャクソンの元秘書。ライブステージが何より好きだ。

そしてテイホツとの娘、ツミ、27歳。この「エデンの園」と、祖父と過ごした思い出への愛着が強すぎて、別の地で生きていくことなど想像すらできない。今は、自分が何者かを明かすことなく、双眼鏡を携え、ゲストのガイドを務めている。モツのハイキング、あるいはバードウォッチング……。



上: 海、空、ラグーン、グリーン。環境ならではの、天然色のハーモニーを楽しんで。
下: ホテルのエレメント一つひとつがティアロア島の自然と調和する。



陽の光でさまざまに変化する景観も魅力。



ハイロアジサシ、クロアジサシ、シラサギなど、ツミはすべての鳥を知っていて、彼女しか知らない名前と呼ぶ。土地の精霊たちと、目には見えない世界を生きている。

ホテルの建設は、ブランドの遺志を尊重し、まずエネルギー計画から着手された。目標はCO₂排出ゼロ。採用されたSWAC（海水冷却システム）は、ブランドのアイデアのひとつ。その画期的な技術は、パシフィック・ビーチコマー社が実用化している。水深935mの深海から水温4℃の海水を、長さ2.5kmのパイプで汲みあげるといふので、敷地内の全冷房を可能にし、ピュアなウォーターをスパに供給。その他、照明や給湯に関しては、2400枚のソーラーパネルを滑走路沿いに設置して太陽光を活用。さらには、海水の淡水化ユニットも完備している。このエコ活動にゲストにも協力してもらうため、各ヴィラの前には自転車2台用意されている。

オールインクルーシブだから、ホテルに到着したら、あとはゆっくりとホテルを楽しむだけ。まずは、自然のハーモニーに巧みにグリーンを配置し見事に仕上げられた景観を味わう。それからヴィラでのステイをじっくり堪能。最低でも広さは96㎡で、1〜3ベッドルームが付いている。なにより魅力的なのは、ターコイズブルーのラグーンが一面に広がるビュー。そしてビーチに直結する庭。2つのバー、ビーチレストラン、20テーブルのみで要予約のレス

トラン「レ・ミュティネス」も素晴らしく、見逃す手はない（料金はもちろんインクルーシブ）。総料理長のギー・マルタンが腕によりをかけた、マヒマヒ×ホタテ、小エビのロースト×柚子などのフュージョンや、さまざまな果物、野菜にスパイスをきかせた自家製ポタージュなど料理も最高。

何より心を動かされるのは、島の自然の、無垢で神秘的な美しさ。ラグーンの水中に、あるいはモツを覆う木々の葉一枚一枚に、手つかずの自然の法則に従い、命が育まれている。ブランドの望みが叶い、現在では、地域住民と連携したふたつの組織がティアロア島で活動中。ひとつはティアロア・ソサイエティ。世界中からさまざまな分野

の専門家が10名近く参加し、この地に滞在。クジラ、珊瑚礁、鳥類、サメの研究に従事している。希望すれば見学もできる、知の宝庫だ。テ・マナ・オ・テ・モアナ（海の精神の意）は、ティアロア島のゲストに教育の場を提供している。プログラムのテーマには、ラグーンに集まる何千羽もの野鳥や、小魚の大群、ウミガメなどがある。ウミガメは、3ヵ月かけて4500kmを泳ぎ、フィジー諸島にたどり着き、再びティアロアに産卵に戻る（10月〜3月）。いったい何のために？ 答えは謎のまま。広大な海に浮かぶ小さな島。人智はもとより神々すら凌駕する壮大な運命……まさに映画のシナリオのよう。ブランドの魂は、今このときも、ティアロア島で生き続けている。



NOTEBOOK

ベストシーズン: 5月〜9月、南半球の冬の間。
宿泊料: 食事、飲み物、各種アクティビティ、1日1回のスパ、ダイビング入門教室などがすべて含まれるオールインクルーシブ（ただしプレミアムワインなど一部の特別サービスは料金に含まれない場合もある）。連続2泊からで、ハイシーズン 1泊1室€3,000〜（€1=約132円 2015年11月中旬現在）、ローシーズン 1泊1室€2,400〜（€1=約132円 2015年11月中旬現在）
問い合わせ先: ザ・ブランド 日本地区正規販売代理店 インターナショナル・クルーズ・マーケティング TEL: 03-5405-9213 www.icmjapan.co.jp/thebrand